令和元(2019)年度

企画展　ニューヨーク・アートシーン　ロスコ、ウォーホルから草間彌生、バスキアまで

4月13日～5月19日	入場者総数　6,226人

滋賀県立近代美術館所蔵の国内屈指の戦後アメリカ美術コレクションを中心とした計101点の作品により、20世紀後半のニューヨークの美術界を概観する大規模な展覧会を当館が中心となって企画。鳥取展の後、和歌山、徳島、浦和を巡回した。

企画展　殿様の愛した禅　― 黄檗文化とその名宝 ―

10月5日～11月4日	入場者総数　3,933人

江戸時代の鳥取とゆかりの深い黄檗宗について、本山である宇治・萬福寺や鳥取藩主池田家の菩提寺である興禅寺の名宝をもとに紹介した初の試み。中四国地方ではじめて行われた本格的な黄檗展ということもあり、鳥取県の文化史に新たな1ページを加えた。

企画展　手塚治虫のメッセージ　― 人と動物、共に生きるために ―

7月13日～8月25日	入場者総数　8,841人

ニホンアシカ“リャンコ大王”の剥製や、ニホンオオカミの頭骨をはじめ、鳥取県の絶滅種などを展示。手塚治虫による人と動物の関係を扱った7作品を紹介。初の試みとして自然科学とマンガをコラボさせた展覧会を、手塚プロの協力を得て実施。

企画展　生誕120年　芸術写真の神様・塩谷定好とその時代

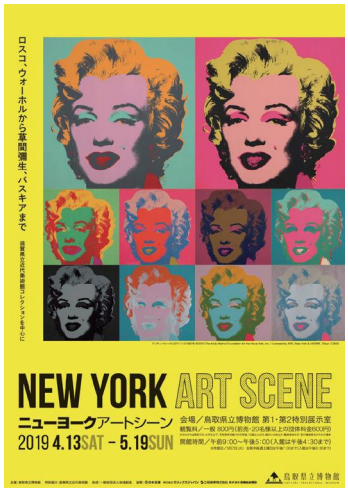
11月16日～12月15日	入場者総数　2,498人

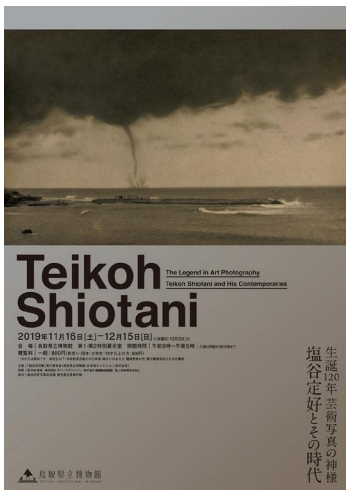
大正末から昭和初期にかけて隆盛した芸術写真の第一人者・塩谷定好の生誕120年を記念し、1920年代の作品から、あまり紹介されてこなかった晩年の作品までを一堂に紹介した。第1・第2展示室を会場に、関係作家の作品もあわせて展示した。

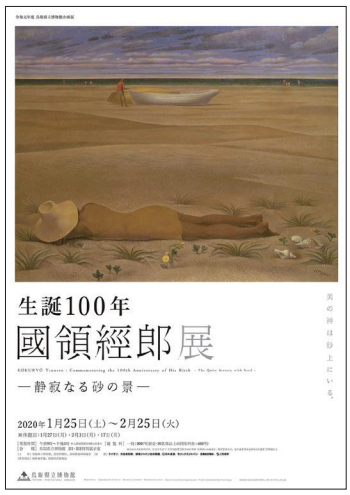
企画展　生誕100年　國領經郎展　― 静寂なる砂の景 ―

1月25日～2月25日	入場者総数　1,775人

砂丘や砂浜を舞台とした情感豊かな絵画を数多く描いた、戦後日本を代表する洋画家の一人・國領經郎の生誕100年を記念し、その画業を紹介した。出身地の横浜美術館と当館、および酒田市美術館の所蔵品を中心に118点の作品を展示した。







令和２(2020)年度

企画展　輝いていた60's ―1960年代のスポーツと生活文化―

6月6日～7月5日	入場者総数　4,565人

東京2020・東京でのオリンピック開催を機に、アジア初となった前大会を振り返り、日本と鳥取県の1960年代の出来事、当時の生活資料を展示紹介した。大型資料の展示やジオラマを製作して、ひと昔前の豊かな時代「昭和」を体感できる展示とした。

企画展　こんにちは変形菌！

7月18日～8月30日	入場者総数　10,455人

動物でも植物でも細菌でもない生きもの変形菌を、より多くの人に知ってもらうため、さまざまな標本や模型をはじめ、大型写真や生態映像をふんだんに取り入れて、変形菌が形を変えていく様子や食べたり食べられたりする様子などを紹介した。

企画展　ザ・フィンランドデザイン展 自然が宿るライフスタイル

10月10日～11月15日	入場者総数　10,890人

200年にわたりフィンランドという国を支えた染織とガラス工芸の分野の名品を中心に、色彩豊かで創造性に満ちた各種のデザイン・プロダクツおよび絵画類、関係資料等計約300点を展示し、フィンランドのデザイン世界の背景と魅力を紹介した。

企画展　ミュージアムとの創造的対話03 何が価値を創造するのか？

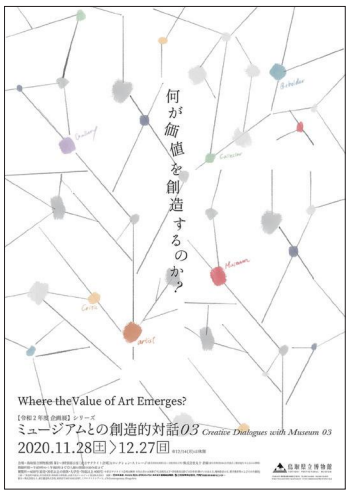
11月28日～12月27日	入場者総数　1,988人

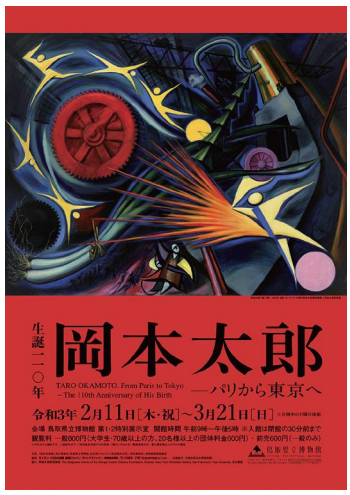
創造的な対話を重ねてミュージアムの可能性を広げることを目的とした新しい現代美術シリーズ展の第３回。ある個人コレクターのコレクションと、その収蔵作家による新旧作品の展示を通じて、美術作品の価値に関する考察を促すことを試みた。

企画展　生誕110年　岡本太郎 パリから東京へ

2月11日～3月21日	入場者総数　10,555人

岡本太郎に焦点を当て、戦前のパリ時代と、多岐にわたる活動を繰り広げた帰国後の東京での動向を照応させながら、各時代の作品を第１・第２展示室にて展観し、パリで育んだ前衛芸術家との交友と、戦後日本の芸術運動との関係を検証した。





令和３（2021）年度

企画展　受贈記念 垣田堅二郎コレクション展

４月10日～５月９日	入場者総数　1,978人

令和２年度に倉吉市の垣田堅二郎氏より版画作品を中心に167点の美術作品が寄贈されたことを記念し、第１・第２展示室にそれら全てを一堂に展示した。ルオーや深澤幸雄、菅井汲、宇佐美圭司といった近現代作家の優品を紹介した。

企画展　クジラとイルカの世界

７月17日～８月29日	入場者総数　13,401人

さまざまな実物標本や貴重な映像資料を用いてクジラ類の魅力を紹介。水中生活への適応や形態の多様性、食性や繁殖行動についても紹介した。また県内の漂着記録などを例として、漂着鯨類を調査することの意義について考える材料を提供した。

企画展　とっとりの乱世 ― 因幡・伯耆からみた戦国時代 ―

10月９日～11月７日	入場者総数　5,005人

現在の鳥取県を構成した因幡・伯耆国の戦国時代を紹介する展覧会。今まで展示されることがなかった当館の所蔵品や県内資料を多く出品して読み解いた。また、近年発見された新出史料も初公開し、鳥取藩池田家やその藩士たちの戦国時代の歴史にも光を当てた。

企画展　東郷青児と前田寛治、ふたつの道

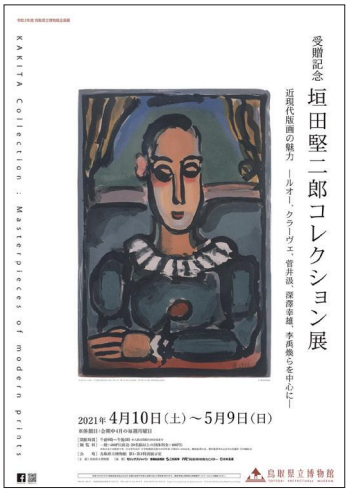
11月20日～12月26日	入場者総数　3,683人

鳥取県と損保ジャパンの包括連携協定に基づく取り組みとして、SOMPO美術館の収蔵品から東郷青児らの作品45点と、当館の収蔵品から前田寛治らの作品55点を選び、第１・第２展示室を会場に一つの展覧会を構成した。

企画展　小早川秋聲 ― 旅する画家の鎮魂歌 ―

２月11日～３月21日	入場者総数　2,607人

鳥取県ゆかりの日本画家・小早川秋聲の没後初となる全国巡回回顧展。個人所蔵品を中心に、小早川の代表作や初公開の作品を含め、初期から晩年までの作品約100点と資料を展示し、従軍画家という一側面に留まらない豊かな画業を紹介した。



令和４（2022）年度

企画展　三蔵法師が伝えたもの　奈良・薬師寺の名品と鳥取・但馬のほとけさま

４月９日～５月15日	入場者総数　4,705人

仏教に大きな影響を与え『西遊記』で知られる中国・唐の三蔵法師を鼻祖とする法相宗の大本山・薬師寺の歴史と文化を、同寺所蔵の名品を展示した。あわせて鳥取県内と但馬地方に残る奈良から平安時代にかかる仏像・仏画を紹介した。

企画展　すべてみせます！　収蔵庫の資料たち

10月29日～12月11日	入場者総数　7,490人

自然、人文（民俗・歴史）、美術の３分野からなる総合博物館として、半世紀にわたり収集・保管を続けてきた当館の収蔵資料・作品を可能な限りすべて展示し、資料や作品の収集および調査研究の50年を紹介。

企画展　ティラノサウルス展　*T. rex* 驚異の肉食恐竜

６月18日～８月28日	入場者総数　64,139人

全長約12mを誇る最大級の肉食恐竜ティラノサウルス。植物食恐竜を襲うティラノサウルスの全身骨格レプリカや、動くティラノロボットを展示、インタラクティブ動画も導入し、姿かたち、身体能力、生活様式など最新の研究成果をもとに紹介。

企画展　安岡信義 1888-1933　近代洋画の黎明期を生きた画家

２月11日～３月21日	

鳥取県出身の洋画家・安岡信義の画業を初めて網羅的に紹介した。会場は第１・第２展示室。館蔵品と個人所蔵品を中心に、確かな素描力と外光派に由来する空間表現が結実した安岡作品を展示するとともに、師の岡田三郎助らの作品も展示した。